



すくもをつくる

9月分

はじめに

このところ皆様からのお便りの中に、藍の不作の声があります。天候の関係もありますが、育てる大変さを感じています。また、高齢化のため、徳島でもすくもが手に入りにくいようなありさまです。

種を蒔いて、芽が出る、植えて水をやる。それだけで大きくなるような気がするものですが、土を寄せる、草取りをする、消毒をする。お百姓さん達の苦労があつての作物と感じられた方もおられるようです。

今回はすくもを作ります。3kgの乾燥葉を作られた方は少ないかと思いますが乾燥葉は来年まで保存できますので、溜めて作ってください。

奈良時代や平安時代の染めや織りなどが書き記されている『延喜式』と言う書物の中には藍に関する記述があります。その材料の中に薪が使われていますので、煮て染めたのではないかと解釈されています。

では、現在使われているすくもはいつ頃から使われるようになったのでしょうか。600年前という説もありますが、盛んになったのは江戸時代からではないでしょうか。阿波の吉野川は天井川と言われて、四国山地の水を集めた下流は周囲の平地より高い位置にあり、たびたび洪水を起こしていました。特に、稲の収穫前に台風による被害は大きく、当時の藩主は台風の前に収穫の出来る藍作を奨励しました。上流から流れ着く肥沃な土砂が上質の藍を育て、美しい色を染められるすくもが出来たので藍玉に加工して全国に運搬され、一大産業として栄えていったのでしょうか。

明治の中頃に化学染料が発明されると、手軽な事を理由に次第に衰えていったのは藍の世界のみではありません。特に、太平洋戦争では食糧増産の為に姿を消しかけた事もありました。その後、豊かな時代を過ごした後に、気がつくとも恐ろしい事が起きていました。化学の世界は、害という副産物を地球にもたらしました。自然との関わりから得た手のかかる技は、人に優しく血が通っていました。そのことに

気が付いた私達は、自然の染めを再び必要としてきたのです。

ガイドブックに書きましたように、徳島で5人、日本で6人しかいらっしゃらない藍師の一人、新居氏の傍らで指導を受けています私にとって、すくもを作る大変さはわかっていますから、自分で作ろうなどと思いませんでした。でも、各地からの要望が多く、すくもが足りない事も痛感しています。寝床で行う本格的な技には程遠い事はわかっているのですが、手づくりのすくもを作ってみようとの思いを抱いたのはここ数年の事でした。乾燥葉を取ってくださるグループが出来たので、少量でも出来るすくも作りに取り組んでみました。

もう一つすくもを作る目的は、沈澱藍を醗酵建てるための発酵菌に使用したいからです。インドや沖縄よりも温度が低いのと、藍の含藍分が低い（と思うのですが…）沈澱藍だけでは醗酵しにくいのです。醗酵したすくもを種に、沈澱藍を注ぎ足して液を作る。そんな方法を試してみたかったです。

次回にその方法を解説します。

新居修氏のすくも造り

ガイドブック 99頁参照

私が新居修氏の傍らで、藍の指導を受けるようになって十数年の月日が経ちました。夏の間の収穫期間が過ぎて秋風が吹く頃になると、乾燥葉がぎっしり詰まった背丈ほどの大きなカマスが寝床に持ち込まれます。土を叩いて固められた土間の上に、いくつものカマスが開けられて乾燥葉の山が出来ます。ほこりの舞うその山の上に、水がしぶきを上げてかけられます。大きなクマデとハネで、それを混ぜながら切り返していくのです。5～6日おきに行われるその作業は、20回、4ヶ月の工程です。回を重ねるごとにその山の高さは低くなり、次第にアンモニアの強い匂いが鼻をつくようになります。山の中に手を入れると、その熱さに自然の不思議を感じます。

モウモウと立ちこめる白い湯気の中に、私の脳裏に焼き付いた姿が見えます。平成8年に亡くなられた新居さんの奥さんの、黙々と切り返しの作業をしている姿です。交通事故でその姿が突然見られなくなったのです。大きな痛手を受けたご家族でしたが、その遺志は受け継がれ、今湯気の向こうには若い人たちの声が響きます。

機械化の進む農作業の中で、伝統の手作業は変わることなく厳しい労働に支えられているのです。汗の滲む素材、心の込められた技と自然の摂理が生み出す美しい色、染めるたびに感謝を忘れてはならない思いです。

ぜひこの作業を見学にいらして下さい。卒業生の中には寝床を作って新居さんの

様に本物のすくも作りを始めた生徒さんもありますのでがんばってください。

※公開はここまでです。